

Vincent van Gogh ゴッホ展

本展のみどころ

1 ファン・ゴッホとハーグ派・印象派の作品約 80 点を展示

7年ぶりの来日となる《糸杉》(メトロポリタン美術館蔵)や、ファン・ゴッホの「最も美しい作品のひとつ」と称される《薔薇》(ワシントン・ナショナル・ギャラリー蔵)など約 50 点のファン・ゴッホ作品をはじめ、マウフェ、マリス、モネ、セザンヌ、ゴーギャンなどハーグ派・印象派の巨匠たちの作品を多数ご紹介します。

2 ファン・ゴッホとハーグ派・印象派の関係を紹介

本展では、ファン・ゴッホに大きな影響を与えたハーグ派と印象派に焦点をあて、ファン・ゴッホとそれぞれの画家や作品との関係についてご紹介します。特に、日本では注目されてこなかったハーグ派との関係を知ることのできる貴重な機会になるでしょう。

3 ファン・ゴッホの思いを手紙から紹介

ファン・ゴッホが弟のテオをはじめ家族や友人たちに送った手紙の中から、本展の出品作品や作家について触れている言葉を選び、作品とともに掲示します。ファン・ゴッホ自身の言葉に導かれた鑑賞をお楽しみください。

4 世界中から作品を借用

これまでのファン・ゴッホ展では、彼の故郷であるオランダの美術館からの作品借用が中心でしたが、このたびはそれに加え、イスラエル、スイス、アイルランドを含む 10 か国・地域 27 ヶ所にわたる所蔵先から作品を借用しています。日本初公開の作品も含まれており、これまでに日本で見る機会の少なかった作品をぜひご覧ください。

※兵庫会場のみに出品予定の作品があります。

作品の詳細や公開時期等は HP 等でご確認ください。



1) フィンセント・ファン・ゴッホ 《糸杉》1889年6月
油彩・カンヴァス 93.4 × 74cm メトロポリタン美術館
Image copyright © The Metropolitan Museum of Art.
Image source: Art Resource, NY

開催趣旨

1880年、27歳の頃に画家を志したフィンセント・ファン・ゴッホ (Vincent van Gogh, 1853-1890) は、画業の初期にハーグ派の影響を受けました。特に、中心的な画家のひとり、アントン・マウフェ (Anton Mauve, 1838-1888) と縁戚関係にあったことから彼に直接の指導を仰ぎ、その後、ハーグに移住して他の画家たちとも交流します。ヨゼフ・イスラエルス (Jozef Israëls, 1824-1911) やヤコブ・マリス (Jacob Maris, 1837-1899)、マテイス・マリス (Matthijs Maris, 1839-1917) のマリス兄弟らを中心としたこのグループは、街の近辺で出会う身近な風景を描きました。対象を正確に写し取るのではなく、示唆に富んだ筆致で仕上げた彼らの絵には、時としてスケッチのような趣が残されています。このように、細部ではなく印象を重視した手法をファン・ゴッホはまず身に着けたのです。その後彼はパリに出ると、印象派が打ち出した鮮やかな色遣いに出会ってその虜となり、色の表現力を学び、実践するようになります。

本展では、このようにファン・ゴッホの画業の初期から、印象派の洗礼を受けて独自のスタイルを確立するまでを追います。ファン・ゴッホ自身の絵画やドローイングに合わせて、彼の絵の基礎になり、方向性を決定づけたハーグ派と印象派の作家たちの作品も展示することで、ファン・ゴッホがファン・ゴッホとなるまでの過程をご覧ください。短くも豊かな画家としての人生を、作品と彼自身の言葉を通してご覧ください。

開催情報

特別展「ゴッホ展」

会期	2020年1月25日[土] - 3月29日[日]
開館時間	午前10時 - 午後6時(金・土曜日は午後8時まで) 入場は閉館の30分前まで
休館日	月曜日(ただし、2月24日[月・休]は開館、翌25日[火]は閉館)
会場	兵庫県立美術館(〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1)
主催	兵庫県立美術館、産経新聞社、読売テレビ
後援	オランダ王国大使館、サンケイスポーツ、夕刊フジ、フジサンケイビジネスアイ、ラジオ大阪
協賛	第一生命グループ、大和証券グループ、高松建設、NISSHA、公益財団法人伊藤文化財団、一般財団法人みなと銀行文化振興財団、TKG Foundation for Arts & Culture
特別協力	公益財団法人日本教育公務員弘済会 兵庫支部
協力	KLM オランダ航空、日本航空、ヤマトグローバルロジスティクスジャパン

観覧料金

区分	当日		[その他割引適用料金]		
	当日	団体(20名以上) / 前売(2020年1月24日(金)まで販売)	区分	当日	団体(20名以上)
一般	1,700円	1,500円	70歳以上 ¹⁾	850円	750円
大学生	1,300円	1,100円	障がい者 ¹⁾ 一般	400円	350円
高校生以下	無料	無料	^{1) 2)} 大学生	300円	250円

1) 証明できるものの提示が必要です。

2) 障がいのある方1名につき、介護の方1名は無料。

※金額はいずれも消費税込金額です。

※コレクション展は別途観覧料が必要(本展とあわせて観覧される場合は割引あり)。

※主な販売場所: 兵庫県立美術館ミュージアムショップ(前売のみ)、ローソンチケット(Lコード: 57538)、チケットぴあ(Pコード: 769-950)、セブンチケット(セブンコード: 080-483)、楽天チケット、イープラス、CNプレイガイド、阪神プレイガイドほか京阪神のプレイガイド。

※チケットレスで入場できる公式オンラインチケットもぜひご利用ください!

展覧会構成

第1部 ハーグ派に導かれて

ファン・ゴッホの唯一の師と言われる画家アントン・マウフェは、ハーグ派の中心的な人物でした。マウフェから対象を観察することや画材の基本的な扱い方を学び、その後、その他のハーグ派の画家たちと交流する中でファン・ゴッホはモチーフに真摯に取り組む姿勢を身に付けます。

《1-1 独学からの一步》

はじめ独学で絵を学んでいたファン・ゴッホは、色彩やデッサンに関する専門書を読んだり、ジャン＝フランソワ・ミレーなど過去の巨匠たちの作品を模写したりしていました。

《1-2 ハーグ派の画家たち》

19世紀後半にオランダの都市ハーグを拠点に活動した画家たちのグループをハーグ派と呼びます。彼らは、街の周囲に広がる田園地帯や海岸の風景を詩情豊かに描きだしました。



2) アントン・マウフェ 《4頭の曳き馬》制作年不詳 油彩・板 19.5 × 32cm ハーグ美術館
© Kunstmuseum Den Haag

「テオ、色調と色彩がどれほど重要なことか！

それに対する感覚をつかめない者は、生命を表すことなんてとうていできないだろう。

これまで僕には見えていなかったものを、マウフェはたくさん教えてくれた。」

—1881年12月23日頃 弟テオへの手紙より（エッテン）

「自然、現実、真理。

これらのものから芸術家は意味や解釈、特質を取り出し、そこに表現や自由を与え、暴露し、解放し、つまびらかにする。

マウフェやマリスやイスラエルの絵は、自然そのものよりも明快に語るんだ。」

—1879年6月19日頃 弟テオへの手紙より(ヴァム)



3) マティス・マリス《出会い(仔ヤギ)》1865-66年頃
油彩・板 14.8×19.7cm ハーグ美術館
© Kunstmuseum Den Haag

《1-3 農民画家としての夢》

ファン・ゴッホは初めての油彩画による大作《ジャガイモを食べる人々》に取り組むべく、ひと冬をかけて習作を描き準備を整えました。

「僕はまだ十分に土で描かれた頭部というものを自分のものにしていない。

今後はもっと手がけていきたいんだ。」

—1885年5月28日頃 弟テオへの手紙より(ニューネン)

4) フィンセント・ファン・ゴッホ《農婦の頭部》1885年 油彩・カンヴァス
46.4×35.3cm スコットランド・ナショナル・ギャラリー
© National Galleries of Scotland, photography by A Reeve



「リトグラフについては説明しておきたい。僕はあれを記憶だけで、しかも1日で仕上げたんだ。頭がおかしくなりそうなほど構図を探して、とても難しい処理をして、それらをまとめることができる新たなアイデアを探していたんだ。」

—1885年7月15日頃

友人の画家ファン・ラッパルトへの手紙より(ニューネン)

5) フィンセント・ファン・ゴッホ《ジャガイモを食べる人々》1885年4-5月
リトグラフ(インク・紙) 26.4×32.1cm ハーグ美術館
© Kunstmuseum Den Haag

第2部 印象派に学ぶ

弟テオを頼ってパリに出たファン・ゴッホは、初めて目にする印象派の作品に大きく衝撃を受けます。原色を用いた明るい画面作りと筆触を残す描き方を取り入れたことで、作風を劇的に変化させました。それから南仏、パリの北方へと移動する中でファン・ゴッホは自然を観察し、独自の色彩と筆遣いを追求し続けました。

《2-1 パリでの出会い》

1886年の2月にパリに出たファン・ゴッホは、孤高の画家モンティセリや日本の浮世絵、印象派など彼の芸術に大きな影響を与える出会いをいくつも果たしました。



「きみが^ま死^にってから4枚仕上げた。今は大きなサイズにとりかかっている。こういった大きな、長いカンヴァスはなかなか売れないことはわかっているが、そのうち人々はこうした絵の中にこそ開けた空や陽気さを見てとるだろう。そしてみんなが居間や田舎の別荘をこういった絵で飾ることになる。」

— 1887年7月23日から25日の間頃 弟テオへの手紙より（パリ）

- 6) フィンセント・ファン・ゴッホ 《モンマルトルの家庭菜園》
 1887年6-7月 油彩・カンヴァス 97.5×129.5 cm
 アムステルダム市立美術館
 © Stedelijk Museum, Amsterdam

《2-2 印象派の画家たち》

それまで写実主義的な絵を描いていたファン・ゴッホは、印象派の作品に大きく衝撃を受け、その明るい色遣いや筆触を取り入れるようになりました。

「ここで自然を描くためには、どこでだって同じだが、長い間自然の中にいなければならない。[...] なぜなら光は神秘的で、モンティセリもドラクロワもそのことを感じていたからだ。それに、ピサロも昔そのことについてよく話していたよ。だけど僕はまだ彼が言うように理想的にはまったく描けない。」

— 1889年6月25日 弟テオへの手紙より（サン＝レミ）



- 7) カミーユ・ピサロ
 《ライ麦畑、グラット = コックの丘、ポントワーズ》
 1877年 油彩・カンヴァス 60.3×73.7cm
 静岡県立美術館

「ピサロが言っていることは本当だ。色を調和させたり、または不調和にすることで生まれた効果は、思い切って強調しなければならない。」

—1888年6月5日頃 弟テオへの手紙より（アルル）

- 8) カミーユ・ピサロ《エラニーの牛を追う娘》1884年
油彩・カンヴァス 59.7×73.3cm 埼玉県立近代美術館



「アントウェルペンでは、僕は印象派が何なのかすらわかっていなかった。今や彼らの作品を見てきて、その一員ではないにしても、印象派の絵のいくつかに大いに感服している

—例えばドガの裸婦やクロード・モネの風景画なんかがそうだ。」

—1886年9月から10月 友人の画家リヴェンスへの手紙より（パリ）

- 9) クロード・モネ《クールブヴォワのセーヌ河岸》1878年 油彩・カンヴァス
50.5×61cm モナコ王宮コレクション
© Reprod. G. Moufflet/Archives du Palais de Monaco

《2-3 アルルでの開花》

南仏の光溢れる景色の中で、ファン・ゴッホは独自の技法を打ち立てていきます。原色をつかい、絵の具を厚く塗り重ね、魅せられた風景や人々を独自の描き方でとらえていきました。

「周囲を見渡すと自然の中にたくさんの発見があって、それ以外のことを考える時間がほとんど無いことだ。なぜかという、今はちょうど収穫の時期にあたるからね。[...] この1週間はずっと小麦畑の中において、太陽にさらされながらとにかく仕事をしたよ。」

—1886年6月21日 弟テオへの手紙より（アルル）

- 10) フィンセント・ファン・ゴッホ《麦畑》1888年6月
油彩・カンヴァス 50×61cm P. & N. デ・ブール財団
© P. & N. de Boer Foundation

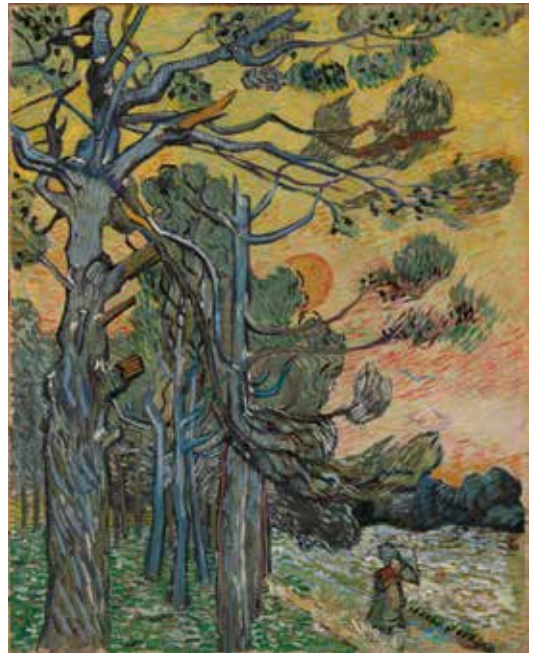


《2-4 さらなる探究》

精神病の発作によってサン＝レミの精神療養院に入っても、またパリ北部に位置するオーヴェール＝シュル＝オワーズに移っても、ファン・ゴッホは制作する手をとめず最後まで自分自身の芸術を追い求めました。

「この手紙を書いている間、今とりかかっているカンヴァスのところまで行って、2、3描き足した。それは赤、オレンジ、黄色の空を背に立つぼろぼろの松だ。昨日はとても鮮やかで、混じり気のない輝くような感じだった。だが、きみに手紙を書いているうちにどういいうわけかカンヴァスを見て僕は言った。『こうじゃないぞ』」

-1889年12月9日か10日 妹ウィルへの手紙より(サン＝レミ)



11) フィンセント・ファン・ゴッホ
 《夕暮れの松の木》1889年12月
 油彩・カンヴァス クレラー＝ミュラー美術館
 © Collection Kröller-Müller Museum,
 Otterlo, The Netherlands



12) フィンセント・ファン・ゴッホ《薔薇》1890年5月 油彩・カンヴァス
 71 × 90cm ワシントン・ナショナル・ギャラリー
 © National Gallery of Art, Washington D.C., Gift of Pamela Harriman in
 memory of W. Averell Harriman

「サン＝レミにいた最後の数日間、一心不乱に花束を描いたよ。薔薇や紫のアイリスだ。」

-1890年6月5日 妹ウィルへの手紙より(オーヴェール＝シュル＝オワーズ)

関連事業

1. 記念講演会

「ファン・ゴッホ、ハグ、パリ… — 変革と反復 —」

講師：囿府寺 司 氏（大阪大学教授）

日時：1月26日（日） 午後2時～（約90分）

会場：ミュージアムホール（定員250名）

※聴講無料、要観覧券、当日午前10時からホワイエで整理券配布

※兵庫県立美術館「芸術の館友の会」会員優先座席あり

2. KEN-Vi 名画サロン特別上映

①「ゴッホ 最期の手紙」(2017年／96分)

日時：2月15日（土）

②「世界で一番ゴッホを描いた男」(2016年／84分)

日時：3月20日（金・祝）

会場：ミュージアムホール（定員250名）

主催：兵庫県立美術館アートフェュージョン実行委員会、兵庫県映画センター

※料金や上映時間などの詳細は、主催（tel.078-331-6100）までお問い合わせください

3. 学芸員による解説会

日時：2月22日（土）、3月14日（土）、3月28日（土） 各日午後4時～（約45分）

会場：レクチャールーム（定員100名）

※聴講無料、定員に達し次第入場を締め切ります

4. おやこ解説会

日時：3月14日（土） 午前10時30分～（約30分）

会場：レクチャールーム（定員20組）

※聴講無料、要事前申込み、詳細はHPをご覧ください

5. ミュージアム・ボランティアによる解説会

日時：会期中毎週日曜日 午前11時～（約15分）

会場：レクチャールーム（定員100名）

お問い合わせ先

兵庫県立美術館

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1

TEL: 078-262-0901 (代) FAX: 078-262-0903 (代)

<https://www.artm.pref.hyogo.jp>

取材・画像提供に関すること

営業・広報担当

TEL: 078-262-0905 (担当直通) FAX: 078-262-0903

展示内容に関すること

担当学芸員：小野尚子、岡本弘毅

e-mail: ono@artm.pref.hyogo.jp

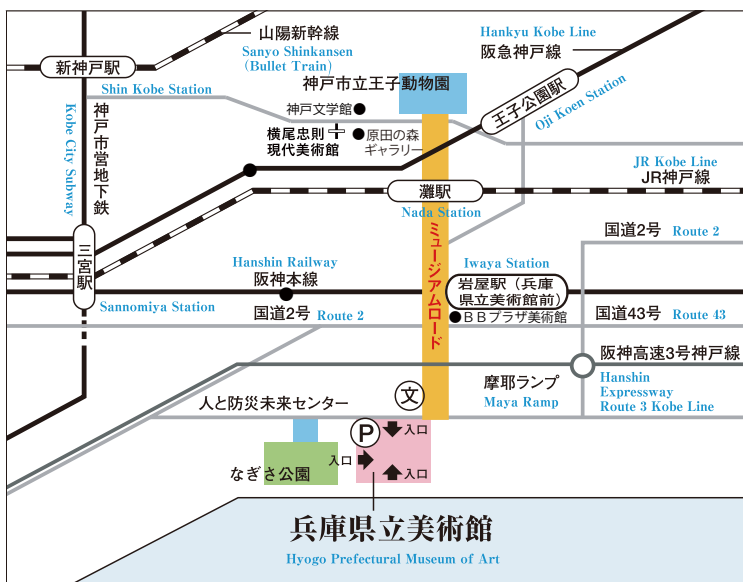
TEL: 078-262-0909 (学芸直通) FAX: 078-262-0913 (学芸直通)

公式HP: go-go-gogh.jp

SNSアカウント: @2019gogh2020

【交通案内】

- ・ 阪神岩屋駅（兵庫県立美術館前）から南に徒歩約8分
 - ・ JR神戸線灘駅南口から南に徒歩10分
 - ・ 阪急王子公園駅西口から南西に徒歩約20分
 - ・ JR三ノ宮駅南から神戸市バス（29、101系統）阪神バスにて約15分
HAT神戸方面行き「県立美術館前」下車すぐ
 - ・ 地下駐車場（乗用車80台収容・有料）
- *ご来館はなるべく電車・バスをご利用ください
 *団体バスでお越しの場合は、バス待機所のご予約をお願いします。



画像使用に際しての注意

このプレスリリースに掲載されている画像データをプレス掲載用にご用意しております。末尾の「申込書」をご使用ください。

○作品画像を媒体掲載される際には、「申込書」に記載の作品名・制作年・所蔵などを必ず入れてください。

○作品画像は全図で使用してください。トリミングや文字を重ねるなど画像の加工・変更はできません。

○画像データ使用は、本展覧会の紹介用のみとさせていただきます。それ以外での使用はできません（会期終了まで）。

○再放送、転載など二次使用をされる場合には、別途申請いただきますようお願いいたします。

○雑誌の表紙などに使用される場合は、「営業・広報担当」までご相談ください。

○WEBサイトに掲載する場合は、画像を72dpi以内に設定のうえコピーガード（※右クリック不可）を施しダウンロード不可にしてください。

○基本情報、図版使用の確認のため、ゲラ刷り・原稿の段階で「営業・広報担当」までお送り願います。

○展覧会場の取材、撮影をご希望の場合についても、「営業・広報担当」までご連絡ください。事前にご連絡のない取材・撮影はお断りいたします。

○本展に関する記事をご掲載いただきました際には、お手数ですが、掲載誌・紙または記録媒体（VTR/DVD）、URLなどを、「営業・広報担当」宛てに、1部お送りくださいますようお願いいたします。

広報画像申込書

特別展「ゴッホ展」 2020年1月25日(土)～3月29日(日)

※前頁「画像使用に際しての注意」をご一読のうえ、ご希望の画像の番号に○をつけてください。

- | | |
|----|---|
| 1 | フィンセント・ファン・ゴッホ 《糸杉》1889年6月 油彩・カンヴァス 93.4 × 74cm メトロポリタン美術館
Image copyright © The Metropolitan Museum of Art.
Image source: Art Resource, NY |
| 2 | アントン・マウフェ 《4頭の曳き馬》制作年不詳 油彩・板 19.5 × 32cm ハーグ美術館
© Kunstmuseum Den Haag |
| 3 | マティス・マリス 《出会い(仔ヤギ)》1865-66年頃 油彩・板 14.8 × 19.7cm ハーグ美術館
© Kunstmuseum Den Haag |
| 4 | フィンセント・ファン・ゴッホ 《農婦の頭部》1885年 油彩・カンヴァス 46.4 × 35.3cm スコットランド・ナショナル・ギャラリー
© National Galleries of Scotland, photography by A Reeve |
| 5 | フィンセント・ファン・ゴッホ 《ジャガイモを食べる人々》1885年4-5月 リトグラフ(インク・紙) 26.4 × 32.1cm
ハーグ美術館
© Kunstmuseum Den Haag |
| 6 | フィンセント・ファン・ゴッホ 《モンマルトルの家庭菜園》1887年6-7月 油彩・カンヴァス 97.5 × 129.5cm
アムステルダム市立美術館
© Stedelijk Museum, Amsterdam |
| 7 | カミーユ・ピサロ 《ライ麦畑、グラット＝コックの丘、ポントワーズ》1877年 油彩・カンヴァス 60.3 × 73.7cm
静岡県立美術館 |
| 8 | カミーユ・ピサロ 《エラニーの牛を追う娘》1884年 油彩・カンヴァス 59.7 × 73.3cm 埼玉県立近代美術館 |
| 9 | クロード・モネ 《クールブヴォワのセーヌ河岸》1878年 油彩・カンヴァス 50.5 × 61cm モナコ王宮コレクション
© Reprod. G. Moufflet/Archives du Palais de Monaco |
| 10 | フィンセント・ファン・ゴッホ 《麦畑》1888年6月 油彩・カンヴァス 50 × 61cm P. & N. デ・ブール財団
© P. & N. de Boer Foundation |
| 11 | フィンセント・ファン・ゴッホ 《夕暮れの松の木》1889年12月 油彩・カンヴァス クレラー＝ミュラー美術館
© Collection Kröller-Müller Museum, Otterlo, The Netherlands (+ロゴ) |
| | ※本作品のクレジットには The Netherlands のあとに、クレラー＝ミュラー美術館のロゴが入ります。 |
| 12 | フィンセント・ファン・ゴッホ 《薔薇》1890年5月 油彩・カンヴァス 71 × 90cm ワシントン・ナショナル・ギャラリー
© National Gallery of Art, Washington D.C., Gift of Pamela Harriman in memory of W. Averell Harriman |



●貴媒体についてお知らせください。

○貴社名：

○媒体名：

(新聞・雑誌・ミニコミ・TV・ラジオ・ウェブサイト・その他)

※ウェブサイトへ掲載ご予約の場合、いずれかに○をつけてください。 コピーガード対応 可 ・ 不可
(画像を 72dpi 以内に設定のうえ、コピーガード対応に限り掲載可能です)

○ご担当者名：

○メールアドレス：

ご連絡先 ○電話番号：

○FAX 番号：

○ご住所： 〒

○URL：

○掲載・放送予定日：

○画像到着希望日：

○読者・視聴者プレゼント用招待券：

組

名

様分を希望

(最大5組10名まで。本展を媒体でご紹介いただける場合に限りです)